コラム 人・動物・動物園

思い出の動物たち（2）

～義足のキリン「たいよう」～

小　松　　守

（秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～園長）

動物の出来事と人の関わりは、時に人の心を揺さぶることがある。人それぞれが抱く感情はしだいに凝集し、昇華しながら物語になることがある。「忠犬ハチ公」のように。

2002年の大森山動物園での実話、骨折した子キリンが何度もの手術に耐え義足をつけ懸命に生き、また園スタッフが彼を懸命に支えたことに多くの人が感動し、やがて「義足のキリンたいよう」として物語となり、本などにもなった。獣医師そして園長として、「たいよう」と向き合った20年前のことを今でも鮮明に覚えている。

2001年の夏生まれの子キリンは、力強い太陽のイメージから、市内の小学生により「たいよう」と名付けられた。「たいよう」は運動場で仲間のキリンやシマウマといっしょに遊ぶ元気な子キリンだった。翌春、雪が消えた運動場でも元気に走り回っていた。

事故は突然だった。「たいよう」がシマウマと衝突し転倒、脚を痛めたらしいとお客さんが園に知らせてくれた。休日の私の携帯が鳴り響いた。悪い予感は的中、若い獣医師から「たいようが脚を骨折したようです」と。

聞いた瞬間、頭をよぎったのは「たいよう」の死だった。脚を骨折したキリンは立てなくなり、生きる力が奪われ、死ぬ。キリンの特徴のひとつ、長い脚はキリンの最大の欠点でもある。

混乱した頭で園に急行、状態把握、骨折の治療や処置方法、最悪の場合どう死を迎えさせたらいいのか。諦めの気持も抱きながら現場に駆け付け見た光景は、今でも目に焼き付いている。なんと骨折した脚をかばいながら子キリン「たいよう」は立っていたのだ。

骨折部位は、人なら右手首下の骨、キリンの右前脚中手骨で全体重を支える割には最も細い部分だ。軟部組織が乏しいため血流も少なく骨癒合の期待が非常に薄い部分だった。

そんな否定的イメージを打ち消してくれたのは「たいよう」自身だった。ピョッコン、ピョッコンとぎこちないが、患部に負重をかけないように懸命に部屋に戻ろうとしていたのだ。見ていて胸が締めつけらた。懸命に生きようとする姿が今でもありありと目に浮かぶ。命とは生きようとするものだと改めて思った。

皆、「救ってあげたい」と思ったし、獣医師として傷の新しさ、また彼の生きる底力を感じたことから、治療せねばと意を固めた。キリンの骨折治療は無謀とも思えたが、一方では奇跡を信じてもみたかった。そうさせたのは「たいよう」自身だった。

麻酔と手術の準備が進められた。背の高いキリンの麻酔は未経験なため倒れ込む時の事故が内心怖かったが、躊躇している暇はなかった。３メートルほどの子キリンだから人力支持で対応できるだろうと決断、火事場のなんとやらだ。

麻酔下でのレントゲン検査、患部処理とギプス装着など３時間あまりで何とか処置が終わった。だが、麻酔を覚めさせ、ギプスを施した脚で立たせなければならないのだ。麻酔を覚めさせる薬液を注入すると程なく首を挙げ、皆で刺激すると「たいよう」は勢いよく立ちあがった。

ギプス固定の脚も使い四本脚で立った時、スタッフから歓声が上がった。私は心の中で密かに「やった」とほっとした。希望が持てたし、心地よい疲れであったのを思い出す。

「たいよう」は術後ギプスを着け元気だったが、しばらくすると食欲が低下しはじめた。私の中で封印していた不安が膨らむばかりだった。ギプスに隠され見えない部分で異変が起きていたのだ。「たいよう」の目がそれを物語っていた。

最悪の事態、患部の壊死が疑われた。再検査でそれが明白になった。骨癒合はもう期待できない。助かる見込みがない「たいよう」とどう向き合えばいいのか、悩みは深まり広がるばかりだった。私は毎日「たいよう」と面会、痛々しい彼の姿を見るのが辛かった。言葉では応えてくれないが、手を伸べると「ありがとう」とでも言いたげに鼻先を近づけてくれた。救われる思いだった。

そんな頃届いたのが、子どもたちからの「たいよう」への応援メッセージと、大人からの諦めずに挑戦し続ける動物園への賛辞だった。私たちの選択は間違っていなかったのだろうと思ったし、未知の世界に入り込む勇気ももらった。一方で応援は重圧にもなった。「たいよう」を守らねばならないが、生きてもらうために苦しませているのではないかと、心境は複雑だった。

「たいよう」に生きてもらうためには、再手術が必要だった。壊死部の除去、それは脚の切断だった。キリンの脚を奪うことは立てなくすること、死の宣告のようなものだった。

応援に応えるためにも諦める訳にはいかなかった。切断部分を人工的に補えればと思った。切腱手術は辛い作業、だから自らの手で行なった。子キリンとは言え大動物の関節部腱の切断には力と勇気、そして覚悟が必要だった。「バツン」という音で腱が切断された時、「たいよう、すまない」と思った。だが、感傷に浸っている余裕はなかった。なくした脚の替わりが必要だ。皆で考えたのは加工しやすい青竹だった。関節部に運動選手が使う強靭サポーターを応用した。世間はそれを義足と呼んだ。義足をつけた「たいよう」が麻酔覚醒後に立った瞬間、なんと義足がスポンを抜けてしまったのだ。再装着は「何度もすまないと」と「たいよう」に詫びながら行われた。

義足を着けた「たいよう」、はじめはぎこちなかったが、日に日に歩きが上手になり元気も取り戻した。気になったのはギプスと違い、義足では立ち座りがうまくできなかったことだった。子キリンの体躯は弱いから、疲れると座って休むことが多い。それができない「たいよう」は疲れが蓄積していたに違いなかった。しだいに元気をなくしていった。義足がずれると付け直しも余儀なくされた。一進一退が続いたが、世界に類のない「義足をつけたキリン」としてマスコミは大きく取りあげた。

より良い義足を提供しようと義足製作所から「たいよう」の義足製作の申し出があり、義足の再調整日に合わせ、義足の型取りを行うことになった。予定通りの創消毒処置と型取りも終え麻酔から覚めさせた時、いつもと違っていた。

勢いよく立った「たいよう」だったが、なぜか義足がずれた。再調整し立ち上がらせようとした時、異変が起きた。立とうとして倒れ、すぐ横たわってしまった。「たいよう」の生きる力は底をついていたのだ。もがくこともなく、眠るように逝った。燃えつきるように。87日間の闘いであった。皆呆然とし、静かだった。ただ、心の中では、「よく頑張ったね」、「苦労をかけたね」、「ゆっくりお休み」など、それぞれの思いを抱きながら…。

その数日後、動物園で「たいようのお別れ会」が開かれた。それぞれの思いを伝えるために多くの人が集まった。「たいよう」の存在、置き土産は何だったのだろうか。「命は生きようとするもの」、私はこれを「たいよう」に教わった。